神戸大学　大学教育研究センター　大学教育研究
第 5 号（1996年度）　1997年 3月発行：59-63

授業改善に関する実践的研究
3．授業参観についての一考察

米谷　淳（神戸大学大学教育研究センター助教授）
山内乾史（神戸大学大学教育研究センター助教授）

授業改善に関する実践的研究
3．授業参観についての一考察

米谷　淳（神戸大学大学教育研究センター助教授）
山内乾史（神戸大学大学教育研究センター助教授）

1．はじめに

ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）は大学教員の研究、教育、管理などの資質向上をめざした営みであり、授業改善と不可分のものである。授業改善は大学教員個々人の努力を前提としたものであれ、教員どうしのかかわりあいや、学内外の有志がつくる大学教員のネットワークが大きな役割を果たす。われわれはＦＤ活動の一環としての授業参観のあり方を検討し、神戸大学の新しい全学共通教育システムに組み込んでいく作業に取りかかることにした。その手始めとして平成８年度に２つの作業を行った。

われわれは昨年、４月から６月末まで、京都大学高等教育教授システム開発センターが実施した田中毎実教授の公開実験授業に参観者として、また、授業後の検討会のメンバーとして参加した。[1]そこで、毎回、全ての受講生が見渡せる教室の後ろの席に座り、教授者と受講生の行動を観察し、また、大学教育、大学生、授業改善などについて４・５名の参加者と継続的に議論を進めた。

さらに、神戸大学の１０月からの後期授業では、米谷が担当する教養原論科目「心と行動」の公開を大学教育研究センター研究部会議で宣言し、毎回、山内が授業に出席してＶＴＲ記録と学生観察を行い、授業後にその日の授業についての簡単な講評会をもった。さらに、２回程、田中毎実教授に参観していただき、授業後にコメントをいただく機会を得た。

ここでは、上記の体験を通して感じたこと、考えたこと[2]を述べ、最後に、大学における授業参観の意義を論じる。なお、平成９年度には山内が担当する教養原論科目「教育と社会」を公開し、毎回、米谷が授業に出席してＶＴＲ記録と観察を行う予定であり、参観記録や授業分析などについては次号以降に掲載していくつもりである。

2．授業というコスモロジー　－公開実験授業で感じたこと

京都大学の公開実験授業では、第一に、改めて、授業とは教室という場でなされているものであることを認識させられた。授業がなされる空間としての教室とそれを入れる学舎、そして、それらを包み込むキャンパスや街の雰囲気までもが授業という時間の流れを彩り、香りや味わいを醸し出していることを実感した。教室がどこにあるか、授業がどこでなされているか、そのロケーションが授業をしっかりと位置づけている。

京都大学高等教育教授システム開発センターは京都という街の代表的な大学のキャンパスにありながら、塀の外で街路に面した楽友会館にある。田中教授の授業はその会館の一室を教室にしてなされた。授業参観は学外の教員にも開かれたものであったが、教室のロケーション自体が大学の営みを広く世間にさらしていこうとする京大のセンターの姿勢を象徴するものであったことに気づいた。さらに、旧帝大の名残をとどめる木造の楽友会館の外観と、黒く艶のある木の階段、ステンドグラスで採光された踊り場、そして２階にある教室の高い天井と大きなガラス戸と木製のどっしりとした教卓は、授業を受ける者にピンと張りつめた緊張感と落ち着き・やすらぎ

とを同時に与える。たとえ、この教室の選択が他の事情によるものであったにせよ、こうした伝統と風格を感じさせるたたずまいは、京大の公開講義に似つかわしいものである。教育の場のロケーションやデザインが教授者と受講生の両者にその場にふさわしい行動をとるよう誘うアフォーダンスを形成しているのであり、京大生が京大生らしくなれるのもこのような装置が大きく働いているからであろう。それに比べれば、視聴覚機器だの情報端末だのといったからくりは実に瑣末であり、コストの割に授業という場の演出に大した役割を演じていないことに気づかされた。

毎週、定刻に開講される講義という形式の授業では、その時間帯が午前か午後か、何曜日か、また、どの季節になされるかということも大きな意味をもつ。田中教授の授業は毎週月曜日４限という時間帯に設定され、午後３時少し前に始まり午後４時頃に終了した。座席につくやいなや寝そべり、授業開始後15分ともたずに決まった学生が居眠りをし、３時半を少し過ぎたあたりから全体的に集中力低下を示す行動をし出すことが観察された。これらは授業が月曜４限であることと無関係ではなさそうだ。春から初夏にかけての午後の日差しと京都特有の蒸し暑さ、街路を行き交う車や早々と課外活動を開始する学生たちの音声（騒音）により、放課後間近の午後の授業特有のけだるさや安堵感を受講生に与え、気のゆるみを招いたとも推測される。

授業はある定められた空間と時間に設けられている以上、その制約は授業を形作る大きな要素としてとらえなければならない。自明なこととは言え、授業は授業者の行為だけで決まるものではないことは折にふれて確認する必要がある。もしも、授業改善のための大学教員の個人的努力が実らず、または、散発的で一時的な効果しかあげない場合は、まず最初に授業がどのような場でなされているかを見直すべきであろう。授業というシステムーの中で授業者はそれほど大きな位置を占めていない。むしろ、キャンパスや教室や時間帯などの要因が授業者の行動すらも規定している。授業改善にあたっては、授業を教授者の視点で見る前に、授業の場である時空間、いわば、コスモロジーの視点からみてみるべきであろう。

３．大学教員のジレンマ　－授業担当者として考えたこと

授業は教授者から受講生への科目名やテーマにふさわしい学問内容の伝授、開陳の場としての役割をもつ。そこで、教える側は、外からは、講義をできるだけ的確にわかりやすくすべしと期待され、要求される一方で、内からは、大学で教える内容、大学生になって学ぶ事項と言えるだけの知識の高み、深まり、広がり、複雑さを将来学問の道に進むかもしれない者たちに経験させてやりたいという願いや想いにかられる。教える側にとって教わる側が自己と離れていればいる程、前者の意識が強くなるが、それと同時に、後者についてのフラストレーションが昂揚する。また、教わる者が自己の学生時代のイメージに近い場合には、時として、教員自身の学生時代の記憶を受講生に投射し、つい、その頃の教授者がしたような突き放した厳しい態度をとりがちになる。

大衆化した大学で、基礎知識も理解力もない学生を前にして、「こんな話をストレートにしたらわからないでしょうから、できるだけくだいてポイントをしぼって、要点だけお話ししましょう」というへりくだりは、教える側にすれば学生に対する優越感を担保にした自虐的態度なのかもしれない。かといって、学習意欲もなく学習時間もとろうとせず、参考書や指定図書どころか教科書も読まず、買おうとさえしないような学生から「面白いことをいう先生」「楽しい授業をしてくれる先生」と支持され、人気が出てもしょうがない。かえって、誰にも容易にわからないような高度で難解な講義をしてみせて、「楽勝科目」を期待し、単位取りのためだけに出席する学生から嫌われ、ふりむかれなくなる方が「孤高の人」たる大学教授者としての自負心をくすぐる勲章となるかもしれない。

そもそも学問とはだれにでもわかることではない。一見、常識的な問いに見えても、答えが簡単に出せないことに気づかせること、そして、自分がほとんど何も知らないことを自覚させること、さらに、答えより問いを見

つけだすことの方が重要であり、愉しみも大きいこと、こういったことを教えることは教養教育の根幹のひとつと考える。難しくて何もわからなかったからと失望し、大学に行かなくなる学生を出すことも問題であろうが、それよりも、大した勉強もせずにわかったような気になったり、わずかな知識を得ただけで知ったかぶりをする学生を産み出すことの方が危険ではないかと考える。

半年、あるいは、一年間毎週繰り返される授業を通して学生は教授者の思考方法、学問や教育に対する姿勢、学生への態度を見聞する。それに反発するにせよ、それを受け入れるにせよ、学生はそれらから何らかの影響を受ける。授業にまったく出てこなかった学生が試験直前に教科書やノートを読んだだけではわからない様々なメッセージが授業において伝えられ、受講生にしみこんでいく。教授者の教授スタイル、すなわち、教えようとする構えは教授内容にまさるとも劣らぬメッセージである。そして、前者は後者より、学生に意識され対象化されにくいので、学生の考え方、行動様式、態度に長く深い影響を残すと考えられる。

高邁で高飛車な学者然とした態度、高邁だがへりくだった教員然とした態度、学問には自信がないのに学生を見下した管理者然とした態度、学問にも教育にも自信がなく、学生に迎合しようとした客商売然とした態度のどれもが授業や科目に対する学生のイメージを大きく決める。教授者はそのどれが適しているか、また、望ましいかを考える前に、自分が学生に実際、どのようなイメージでとらえられているかを知るべきである。そして、自己の予想とそれが大きく食い違うならば、どこに原因があるかを探り、そのギャップの解消を第一にすべきであろう。

4．大学で教えることを教えること　－ＦＤ機関の一員として何から始めるか

大学で教えることを大学で教えるという営みは、従来の大学という枠組みでは困難である。確かに、今のところ、大学にそのためのハードもソフトも、あまり整備されているとは言えない。

しかし、学問の自由、教えることの自由を守る砦としての機能を大学が担っているのであれば、大学教員に教えることを指導したり、評価したりすることが非常な抵抗にあい、授業参観などのＦＤの企てが全く盛り上がらず、等閑視されることは必然とも言える。

従って、大学という枠組み自体を変えなければ、授業改善やＦＤやカリキュラム改革という教育改革は成立しない。つまり、大学における教育改革は、大学教員が、これまでの大学についての考え方を壊し、入学してくる学生や、学生の経済的支援をする父兄や、卒業生を受け入れる社会にあわせた自己変化、意味転換をする必要があるのではなかろうか。

しかし、これは旧来の伝統的な大学人にとって、やむを得ないさびしい選択であり、消極的になってしまう。学生にあわせて自らの教え方を変える、あるいは、それまでの、学問を背負って立つ威風堂々とした学者の風体を捨て、学生のレベルまで降りていって丁寧に教えたり、あの手この手で学生の学習意欲を引き上げ、さらには受験生・新入生獲得のためのＰＲや体制作りに心血を注ぐ教育サービス機関の従事者になり下がることにはどうしても気が進まないのは当然かもしれない。

そうは言っても、現場では、学生のニーズにあわせて講義内容を変えるだけでなく、学生や社会が関心をもつテーマについて教えることができるよう、研究・研修をするよう求められている。もはや大学は学問の殿堂ではない。その役割は大学院や研究所にゆずり、それまで学生の質におんぶして片手間にしてきた教育機関としての役割を本腰を入れて果たしていかなければならない時期に来ている。そのための意識改革がこれからの大学人に求められている。今後、これまでの枠組みにとらわれない、リサーチマインドと時代へのアンテナを備え、柔軟性と感性をもちあわせた大学教員が増えていくことを期待したい。

大学で教えることを学ぶこと、教えることを教えることが本格的に制度化されなければならないのは、組織的

な意識改革が大学に求められているからである。国立大学も学問の進歩より受益者サービスとしての大衆高等教育を要求する国民からつきあげられるようになっている。学びの園から教育現場への変革ができるかどうかは大学自体の存亡にかかっているといってよいだろう。

5．大学での授業参観の意味

小中高の教員となるには大学で教育学や教育心理学や教科教育法を学び、現場での教育実習を受け、教員免許を取得しなければならない。これに対して大学教員は、授業法や教育指導に関する正規の講義も実習も受けずに、いきなり教壇に立つ。教育学や教育心理学などを専攻しなければ大学教員となるまでは、大学教育や授業法への知識も関心ももたずに、ひたすら専門領域の研究者となることに努めているのが普通の大学院生の姿であろう。

大学教員となる可能性をもつ博士課程の大学院生には、大学教育や大学授業法について講義や実習を通して学ばせる機会をできるだけ与えたい。そして、とくに、専門外の学生に自分の専門領域を教える教養教育の現場に触れさせ、その担当者との交流を通して、様々な学生に自分の専門領域を教えることの意義や方法を考えさせる機会が必要である。そのためには授業参観が適している。近い将来、大学教育研究センターのような機関が、大学院教育の一環としての授業参観を組織的に運営することになると予想する。

新しい大学は新しい人材の養成からである。大学改革は新たな大学人の育成に帰結する。一部の実験大学の先例[3)]が示すように、授業参観が大学での新しい教養教育を創り出し、支える制度として定着する可能性は十分ある。さらに、大学院の質的・量的変容に伴い、非専門の大学院生に高度教養教育が難なくできる大学院教員への需要が高まっていくだろう。大学院が大学教員養成機関としての役割を果たすべく、ＦＤを大学院教育に取り込むようになるのも時間の問題である。

そのための研究と経験の蓄積、教員や研究者間のネットワーク作りは、ＦＤ機関としての大学教育研究センターの今後の課題のひとつであろう。

【註】

（１）われわれが共同研究者として行った京都大学での田中教授の公開実験授業における学生の行動観察や感想文の分析は京都大学高等教育教授システム開発センター編「開かれた大学授業をめざして　－京都大学公開実験授業の一年間」（玉川大学出版部）に掲載される予定であるのでそれを参照されたい。

（２）本稿は、米谷が1997年３月14日に開催された京都大学高等教育教授システム開発センター公開研究会で公開実験授業の総括をされた田中教授へのコメントとして口頭発表したものをもとにしている。

（３）和光大学の授業参観の実践については米谷が本号に書いた書評を参照されたい。

An Action Study on Improvement of University Teaching: 3. An Essay on Inspection of Classwork

MAIYA, Kiyoshi (Associate Professor, R.I.H.E., Kobe University)
YAMANOUCHI, Kenshi(Associate Professor, R.I.H.E., Kobe University)

Although Improvement of University Teaching (IUT) is based on Faculty Development (FD) for every University teacher, it should not be regarded as his/her individual work. Groupwork of University teachers, e.g., visiting to see classworks of each other, is necessary for inplementation of IUT. It doesnot matter whether the group is voluntary or not.

We started action research project on developping FD groupwork programs which help and facilitate teachers visit to see classworks each other and to discuss teaching problems each other. For the first phase, we visited Kyoto University to see Prof. Tanaka's classwork every Monday from April to June in 1996. For the second phase, Yamanouchi visited Maiya's class at work every Friday from October to December in 1966. Each time, after the classwork, we had small conference to talk about it and variety of special and general teaching problems in University.

In this essay, we discussed some topics of the special and general teaching problems in University; spacio-temporal location, what is called "cosmology", of classwork, dilemma of University teachers, and importance of organizational and/or institutional approach to FD. At the end of this essay, the meaning of inspection of classworks among University teachers in FD was accented.